

読解  
『失樂園』  
(三)

道家弘一郎

A Reading of *Paradise Lost* (III)

---

one Almighty is, from whom  
All things proceed, and up to him return, . . .

V. 469–470.

Both in the beginning and in the end, God is present, because He is “Alpha and Omega, the beginning and the end, the first and the last” (Rev.22.13). Therefore, He created the heaven and the earth, not “ex nihilo,” but “ex Deo.”

The process of the creation is vividly described by Raphael to Adam in Book VII of *Paradise Lost*. The heavenly muse Urania, the spirit of knowledge, that is, *scientia*, is first mentioned here. The scientific information in Book VII marks the beginning of the poem’s treatment, in its latter half, of all things knowable on earth, and has associations with the evolution theory of Charles Darwin. In fact, *Paradise Lost* was Darwin’s favorite poem: he carried it about and read it during his voyage on the Beagle.

Book VII contains many excellent descriptive lines, one of which is on the beautiful figure of a swan that makes readers feel as though they can see it and the image it symbolizes, that of the “Lady of Christ’s.” The final object of evolution is man, which reminds us of the last words of another evolutionist Teilhard de Chardin.

According to the “ex Deo” theory, all things come not only from God but also out of God, and so nothing can be annihilated. But all things were deprived of good because of the original sin of man, and they must be saved from the resultant evils and deficiencies of the sin through the method of dissolution in the end. Then God becomes “all in all.”

## 二、贖罪・創造・審判(承前)

**創造** 第三巻における神と御子とに関する記述は、時空を超えた天上界の消息として絶対的なものであるが、それが地上の人間に知らされるときには、場所を選び、時間をかけて、徐々に次第に明かされるものである。「贖罪」の場合には、第三巻の神なる父と子の約束が、第十二巻の長い歴史のなかで人間に啓示された。「創造」についても同じ手続きが踏まれる。

第三巻においては、父のみが「全能・不変・不滅・無限・永遠なる王」(三372—374)にしてまた「万有の創造者 (Author of all being, III. 374)」と呼ばれる。御子すら「創造されし万物の最初の者 (of all creation first, III. 383)」であるにすぎない。これはヨハネ黙示録第三章14節「神に創造された万物の源である方 (the beginning of the creation of God)」、またコロサイ書第一章15節「御子は、…すべてのものが造られる前に生まれた方 (the firstborn of every creature)」に由来する。このような注は、一九六八年の Fowler より、はるかに早く一七三四年、Richardson, *Notes and Remarks on Milton's Paradise Lost* に見えらる。

ともあれ、父以外はすべて「被造物 (creature, III. 387)」である。ただ御子ひとり、他の被造物と異なる点は、外形的には「父の栄光の輝きが刻印されたように残り」(三388)、内面的には「父の豊かな霊が注入されたように留まる」(三389)、*まじりに*「全能の父 (the Almighty Father, III. 386)」を、遮る雲ひとつなく、眼のあたりに見るような

「神の似姿 (Divine Similitude, III. 384)」であることだ。父は、「天の中なる天も、そこに住むすべての天使も」(三39)、御子によって「創造した (created, III. 391)」、いや、そればかりか、反逆した天使たちも御子によって裁かれたのである (三391—392)。

人間は第四巻になって初めて登場する。『失樂園』におけるアダムの第一声は、愛する妻イーヴに呼びかけて、創造主を賛美することであった。神は「われわれを造り、われわれのためにこの広々とした豊かな世界を造り給うた力 (ある神) (the Power/That made us, and for us this ample World, IV. 412-413)」と呼ばれる。アダムは、人間も自然も、あるいは自己も他者も、要するに全てのものが造られたものであることを自覚している。一日を終えて後、アダムとイーヴが唱和する就寝の祈りにおいても、蒼穹<sup>あおぞら</sup>を仰ぎ、今自分たちの前に展開する空と大気と地と天と、皎々と輝く月と、さらにまた星屑の瞬く夜空を造り給うた神を「全能の創造主 (Maker Omnipotent, IV. 725)」と賛える。

**被造性**  
このような被造性の意識は、いかにして生じたのか。アダムは天使ラファエルに、彼の意識の始まりから話す、「そもそも人間にとって、人間生活がどんなふうにして始まったのかを話すことは難しいことです。自分で自分の始めを誰か知っている者がいるでしょうか？」

For Man to tell how human life began

Is hard; for who himself beginning knew?

VIII. 250-251

これは当時のラムス論理学からしても自明のことである。「記憶が生ずる前にどんなことが起こったか」(八203—204)は、他者から聞く以外に方法はないからである。

「この世界と、眼に映る万象の姿が、初めどのようにして始まったのか、自分の記憶が生ずる以前のそもそもその初まりから何ことがなされてきたのか、それを知りたい、そして子孫にも自分の口を通して知らせてやりたい」(七636—639)、この「記憶以前 (Before his memory, VII: 66)」「知らせてもらわなければ人間的知識のとうてい到達することのできない (Unknown, . . . human knowledge could not reach, VII: 75)」天地の起原をせひとも知りたいというアダムの渴望が、天使ラファエルを引きとめて話させた理由であった。第七・八巻の創造物語は、かくして「神聖なる解説者 (Divine interpreter, VII: 72)」天使ラファエルの口述である。

### 我の 自覚

だが、世界と万象の始原は、天使ラファエルの教示を仰ぐはかはないけれど、自己の意識の始まりは、努めてこれを自覚的に把握直そうとする。それが第八巻におけるアダムの告白であり、おのずから「アダムにおける私の自覚史」になっている。

「熟睡から覚めたとてもいった感じで」彼はどこにいるかを知る。

As new-waked from soundest sleep,

Soft on the flowery herb I found me laid, . . .

VIII. 253-254.

横たわっているのだから、おのずから眼に入ってくるものは天である。アダム視線は「上を」向いている (Straight toward Heaven, VIII. 257)。

広い大空を凝視するうち、やがて「本能的な生氣に促がされて、天に昇ろうとするかのように跳び起き、真っ直ぐに地上に両足で立った。」

... raised

By quick instinctive motion up I sprang,

As thitherward endeavouring, and upright

Stood on my feet.

VIII. 258-261.

両足で立つまでは 'laid' や 'raised' のように他動詞が用いられていることも注意しなければならない。自立はまさにこの行為のなかに表現されている。立てば、おのずから視線は「横を」向き、周囲の山、谷、森、野原、川が眼に入る ('About me round I saw... VIII. 261)°。そしてそこに「生き、動き、歩き、飛ぶ……すべてのもの (Creatures that lived and moved, and walked or flew, /... all things, VIII. 264-265)」が、アダムの心を爽やかな香りと喜びで溢れさせる。次に視線はおのずから「下を」向って、自己の肢体を確かめる ('Myself I then perused, and limb by limb / Surveyed... VIII. 267-268)°。

だが、そこまでは、いずれにせよ「外を」向いていた視線が、ここで一挙に「内を」覗く。「しかし、自分が果して何者なのか、自分が何処どこにいるのか、いかなる理由わけで、ここにこうしているのか、自分には分かりませんでした。」

But who I was, or where, or from what cause,

(I) Knew not.

VIII. 270-271.

それゆえ、天と地と、そしてそこに「生き動く美しい被造物 (ye that live and move, fair creatures, VIII. 276)」に呼びかけて問う、「どうか言ってくれ、見ていたのであれば、私がどんなふうにしてここへ来たのか、どうしてここにいるのか、を。」

Tell, if ye saw, how came I thus, how here!

VIII. 277.

問うことは答えることである、答は直ちに浮んでくる、「自分自身でこの世に生まれてきたのではない、とすれば、…或る偉大な創造主つくりぬしが私を造られたはずだ。」

Not of myself, by some greater Maker then, . . .

## VIII. 278.

「私がこうやって動き、生き、なによりも幸福感を頭で分かるより心で感じるといのは、この創造主のおかげだ、としたら、その方をどうしたら知り、拝むことができるのか、教えてくれ。」

Tell me, how may I know him, how adore,  
From whom I have that thus I move and live,  
And feel that I am happier than I know!

## VIII. 280-282.

これは、使徒行伝十七章にみえるパウロのアテネ伝道からの引用である。パウロはアレオパゴスの真ん中に立って言った、市内に「知られざる神に」と刻まれた祭壇を見つけた、この神こそ「世界とその中の万物とを造られた神」であり、「天地の主」である、もし人が探し求めさえすれば、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはいないから、たやすく神を見出すことができる、その証として、アテネ市民周知の「我らは神の中に生き、動き、存在する」という詩を引用する(使一七22-28)。これは前六世紀のクレタ人エピメニデスの作とされる詩である(岩波版荒井献訳『使徒行伝』<sup>230</sup>)。ここでは「神」はゼウスを指すから汎神論的文脈でうたわれた詩を、パウロが五〇〇年後にキリスト教的文脈のなかに移し、さらに一六〇〇年を隔ててミルトンがそれを継承したのである。「生き、動き」は三者に共通であるが、「存在する」だけがミルトンにはない。ミルトンも<sup>264</sup>行と<sup>276</sup>行では「生き、動き」の順序で、二度繰返す。

live が植物魂 (vegetable soul) をもつもの、move がその上に動物魂 (animal soul) を加えたものの特性であるとするれば、この順序は「存在の階梯」にしたがって植物と動物を指すであろう。それが 281 行で 'I move and live,' と逆転するのは何故か。

外なる自然に眼を注ぐ限り、live and move, VIII. 264, 276 という順序が自然である、直なるかな、その主語は「被造物」一般である。「太陽」(八 273) から大地・丘・谷・川・森、「歩き、飛ぶ」(八 264) 生き物、「枝に囀る小鳥」(八 265) まで、「万物が微笑む (all things smiled, VIII. 265)」。まさに「美わしき天然 (fair creatures, VIII. 276)」である。しかし、これらは「我」ではない。少なくとも「汝」と呼びかけうる他者である。主語が「我」に変わった途端、「I move and live, VIII. 281」と逆転することは極めて自然であり、人間の実感に即している。しかも「造った」「造られた」の関係だけではない。使徒行伝では単に「存在する」とある箇所が、この文は 'And feel that I am happier than I know. VIII. 282' と敷衍される。それはアダムが理性魂 (rational soul) を備えた人間として優位な立場から「が生の実態を把え直し、「存在する」ことの生き生きとした実感を具体的に表現しようとしたからである」と解釈される。

しかし 'I move and live, VIII. 281' の行末にはコンマがあるのび、前の二つの 'live and move' と同く、'I move and live, VIII. 282' は 'I' 行の 'move' や 'live' とはなく 'have' と並び、直接 'Form whom I' と繋がるとは考えられないだろうか。'From' は *OED* II 2

Indicating a person as a more or less distant source of action, esp. as a giver, or sender, or the like. In *OE.* also indicating the agent = by.

とある。それゆえ 281—282 行は、その人「〜から」あるいは「〜のおかげで」、「動き、生きることを得て」、生きるこ

との幸わせ、歓びを、何よりも実感する、という意味になる。

これは単に被造物から創造主へ、つまり、すべての可視・可感的な事物はその存在の根拠を内にもたず、つねに他の存在に依存する、それゆえ、この連鎖を辿ってゆけば、終には、その存在の根拠を自己の内にもつ第一原因、すなわち「動かされずして動かすもの」に到達する、という自然神学のアプローチではない。ここにおけるアダムの告白は、「知る」という知識の階段を超えた、全人的な「感じる」という感情の反応である。

何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるゝ 西行

というのと共通の感情であろう。「どうしたらその存在を知り拝むことができるか」(八280)を尋ねて、「どこへ向かうのかも分からず迷い歩く」(八283)が、「答えは返って来ない」(八285)。腰をおろして物思いにふければ、そのとき初めて疲労感から「眠気に襲われ」(八287)、気だるい感覚に或る柔かい重みがかかり、以前の無意識な状態に陥ると思った瞬間、自己が「解き放(dissolve, VIII. 281)」たれていくのを感じた。そのとき突然「夢」(八292)のなかに「神の姿(shape divine, VIII. 295)」と思われるものが現れる。

幾何学の精神と繊細の精神を区別したパスカルは、『パンセ』のなかで「神を感じるのには、心情であって、理性ではない。これが信仰というものである」(278)、「信仰は神のたまものであるであって、推理のたまものであると思つてはならぬ」(279)、「われわれが真理を知るのには、理性によってのみならず、心情によってである。われわれが第一原理を

知るのは、後者の方法によってである」(282)、という。

ところで、ミルトンが引用した使徒行伝におけるパウロのアテネ伝道は、文字どおり多神教の異邦人、ギリシア人を対象にしたものである。ロマ書になると、パウロの論旨は、いっそう明確である、「神について知りうる事がらは、彼ら〔異邦万民〕にも明らかであり、神がそれを彼らに明らかに示されたのである。天地創造以来、神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、被造物に現れており、これを通して神を知ることができる」(ローマ19—20)。

これは「一般啓示 (General revelation)」もしくは「自然啓示」とよばれ、旧約ではヨブ記(三六24—三七24、三八)、詩編(一九)、旧約続編知恵の書(二三4—5)に始まり、新約ではパウロのリストラ伝道(使徒一四15—17)、アテネ伝道(一七24—28)、そしてロマ書へ引継がれる。ミルトンのアダムは、天地自然に呼びかけて問う。

Tell, if ye saw, how came I thus, how here!

Not of myself; by some great Maker then,

In goodness and in power pre-eminient.

Tell me, how may I know him, how adore,

From whom I have that thus I move and live,

And feel that I am happier than I know!

VIII. 277-282.

この一節は、アリストテレスに始まり中世のスコラに受継がれていく自然神学ではなく、明らかに聖書そのものの記述（一般啓示）に従っている、と思う。

しかし、こうして一旦神を知ったアダム、神に頼んでイーヴの創造を願うまでに成長したアダムにとって、あたかもエジプトの富が正当にイスラエルの所属に帰したように、もはや自然神学の用語にも抵抗はない。アダムの求めに答えて天使ラファエルは、天地創造最終の第六日（第七日は安息の日）、「偉大なる原動者の手（the great First Mover's hand, VII. 500）」によって全天体はその定められた軌道の回転を始め、天は栄光に輝いた、という（七 499—501）。

T・S・エリオットはダンテ論において「高い夢」と「低い夢」とを区別し、ヨハネの黙示録を高い夢と呼んでいる。この区別を借りれば、『失樂園』第四卷<sup>803</sup>行でもふれられるが、第五卷28—93行で、イーヴが見る夢

は「低い夢」に当るのである。この夢をなぞるかのように実際の墮落は起こってしまう（九 532—78<sup>4</sup>）。それに引きかえ、第八卷でアダムの見る夢は文字どおり「高い夢」である。夢の中で、神はアダムの手をとって引き起こし、足が地につかぬどころか、あたかも空中を滑るように野を越え、水の面を越えて、鬱蒼と樹木の茂った山の頂上へ連れて行く。そこは平坦で、広く、周囲はぐるっと美事な樹木が囲み、小道や四阿風な木蔭も多く、これまで目にしてきた地上の光景などは、まったく趣きのなにもに思われた。これこそが、アダムの「住処（*mansion*, VIII. 286）」アダムのために神が備えた「祝福の園（the garden of bliss, VIII. 299）」「樂園（Paradise, VIII. 319）」であった。その形状は、第四卷131—153行に描かれた光景と照合すると、あたかも巨大なコロッセオの外側にも急な階段席状の坂があり、それを鬱蒼たる樹木が覆っている、さらにその梢越しに樂園の生籬が取り巻き、その生籬の上に、美しい花もある樹々の列が垣間見える、という感じである。第十二巻の末尾近くにも「急坂をくだって下に遙かに横たわる平

原く (down the cliff. . . /To the subjected plain, XII. 639-640)」という言葉がある。この崖の上に、「楽園」…二人の幸福な住処 (Paradise, . . . their happy seat, XII. 642)」はあったのである。

夢のうちにアダムは楽園に連れていかれたが、目覚めると、そこは、夢が生き生きと写し出していたように、あらゆるものが現実であった、という。

... I waked, and found

Before mine eyes all real, as the dream

Had vividly shodowed. VIII. 309-311.

‘shadow’は *OED* にある “7. a. To represent by a shadowy or imperfect image; to indicate obscurely or in slight outline; to symbolize, typify, prefigure.” が当ると思う。Paradiseの方に、現在の優位性を認めている。その点は Heaven も Hell も同じで、このような異界ともいへべき次元の世界への移行には、「夢」という方法もしくは時間が必要である、というのではないか。

なお「エデン」は創世記第二章8節に見られ、その語源は「歓喜」とも、アッカド語で「荒野」ともいわれるが、詳細不明(月本照男訳『創世記』岩波版7頁)、という。神は、そのエデンの東の方に「園」を設け、自ら形づくった人をそこに置いた、とある。また15節には「主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた」とあるから、アダムは別の場所で作られたことになる。

「楽園 (Paradise, IV. 132)」は、元来ペルシア語で囲われた場所を意味し、ギリシアではペルシア王の庭園をクセノ

ポンが楽園パラダイスと呼んだのが最初の用例とされる（OEDおよび平井正穂訳注）。なお、楽園が山の頂にあることについては、エゼキエル書二八章13節の「神の園」が、14節の「神の聖なる山」と同定されることによる。

だが、私は『失楽園』のなかに一つの矛盾を感じる。第七卷529—530行ではアダムとイーヴが同時に造られたように書かれているが、第八卷では、アダムが楽園に移されて後、あらゆる動物の番つかいを臨検し命名したうえ、神との孤独問答を経て、神に懇願してイーヴを得たことになっている（842—490）。とすれば、アダムの出生地にまだはつきりした地名はなかった（7535—536）とあるが、イーヴのそれははつきり「エデン区内楽園」となる。

このような違いは、第七卷が創世記一章の創世神話に依拠したのに対し、第八卷は創世記二章のそれに依拠したことによって生じた。アダムはアダマ（土）から造られたからその名があり（創世記二7）、イーヴは、アダムが、おのが骨から造られたゆえに、エバ（命）と名付けた、とある（創世記三20）。二人は出生地も、造られた材料も違う。

**第七卷のインヴォケイション**  
アダムの成長過程を問題としたため第八卷を第七卷の前に扱ったが、成年に達し、妻を迎え、天上からの客人を招くまでになったアダムに、天使ラファエルが聞かせるのが「創造」物語で、第七卷の内容をなす。だが、第七卷冒頭のインヴォケイションは、他の三つのインヴォケイションとくら

べて少し違った趣きがある。第一巻の場合には全体を見渡して高邁な調べがあり、第三巻では神と「われ」のみが向かい合う緊張を感じさせ、第九巻ではいよいよ差迫った大事件に身構えようとする覚悟があらわである。それに対し第七巻の場合は、ある余裕さえ感じられる。それは「天なる詩神（Heavenly Muse, I, 6, III, 19）」とのみ呼びかけてきた天来の靈感を「ウラニア（Urania, VII, 1, 31）」と名付けていることにもよる。

その名前がギリシア神話の「九人の詩女神のひとり」（七6）を指すことは周知の事実だが、詩人がここで必要と

するのはウラニアの「天にて生まれた (heavenly-born, VII. 7)」という、その意味である。かつ、ウラニアはその姉妹なる「永遠の知恵 (Eternal Wisdom, VII. 9)」とともに「山いまだ現れず、泉いまだ流れざる」(七八) 天地創造以前より存在する、と云う。

Before the hills appeared or fountain flowed,  
Thou with Eternal Wisdom didst converse,  
Wisdom thy sister, and with her didst play  
In presence of th' Almighty Father, pleased  
With thy celestial song. VII. 8-12.

かかるウラニアの正体を探ろうとする学者たちの多岐にわたる論究を、ここに繰返す繁は避けて、その結論だけをいえば、ウラニアは天地創造の動力因としてのロゴス(いわばキリストの属性)であり、「知恵 (sapientia)」は父なる神の「予知」(『キリスト教教義論』第一卷第三章)である。知恵は「人間の言葉でいえば、神が何かを定め給う前にその心にきめられた、あらゆることについての<sup>アイデア</sup>意匠に他ならない」という(イェール版散文全集六154、コロンビア版全集十四64)。

『失樂園』第七卷、神は天地とそこに住む人間の創造を意図し、実行を御子に委ねる(七139—161)。御子はその神意(神慮)を体して実行する。

So spake the Almighty, and to what he spake  
His Word, the Filial Godhead, gave effect.

VII. 174-175.

創造の第六日、御子はすべての創造を終って天に帰り、玉座から新しく造られた世界を眺めて、それが神の「大いなる意匠 (great idea, VII. 537)」に因って、いかに善く、いかに美しいかを確めた、という。この 'idea'こそウラニアの姉妹なる 'wisdom' に他ならない。また先に言及した『キリスト教教義論』の神の知恵 (sapientia) であり、万物の意匠 (idea) である。

ロビンズによれば、「シルトンの神学では知恵は、神の内的動力因、すなわち神意もしくは神慮 (decreum)、『教義論』コロンビア版十四(62)と考えられ、この内的動力因、すなわち神意は、その結果として生まれた御子、すなわち外的動力因に先行する」(Harry F. Robins, *If This Be Heresy*, p. 170)。

「全能にして永遠の父なる神 (the omnipotent/Eternal Father, VII. 136-137)」は御子に、「汝、わが『言』<sup>word</sup>、わが生みたる子也 (thou, my Word, begotten Son, VII. 163)」と呼びかけ、創造の業を命ずる。

インヴォケーションのウラニアは、この「言」を指し、「知恵」とは姉妹である、という。とすれば、知恵は姉で、ウラニアは妹である。

知恵と  
知識

ところで、御子が創造の途につこうとしてその姿を現わしたとき、「腰には全能の力を帯び、頭には広大無辺の知恵 (sapience) と愛に輝く冠をつけ、父なる神のすべてが御子のうちに輝いていた」(七194—196)、という。ここにある 'sapience, VII. 195' は 'wisdom' と同義語である。その語源であるラテン語の 'sapientia' は 'scientia' と並べて用いられることが多い。

「ああ、神の知恵と知識との富は深いかな」(ロマ十一33)

「キリストには知恵と知識との凡ての宝蔵れあり」(コロサイ一3)

知恵は *sophia* (希) / *sapientia* (羅) / *wisdom* (英) / 知識は *gnosis* (希) / *scientia* (羅) / *knowledge* (英) である。十七世紀初期のケンブリッジ大学では、「知識」すなわち *scientia* は、知的各分野で「分析」によって真理を積み上げ、法則を引きだして結論に至る営為であり、「知恵」すなわち *sapientia* は、多様な結論から、より高く統一的な法則を「総合」しようとする最高の知的営為とされた (William T. Costello, *The Scholastic Curriculum at Early Seventeenth-Century Cambridge*, p. 96)。かつ、学部生の履修科目では「行為」に関わる *arts* として論理・修辞・倫理が、「知識」に関わる *sciences* として形而上学・物理学・数学・天文学 (宇宙構造論) が科せられた (上掲書 147—149頁)。その結果、ケンブリッジ大学における哲学科の正式名称は今も the Faculty of Moral Science である。ここに *scientia* の内包を見ることが出来る。

知恵の姉妹なる者の正体は上述のとおり。だが『失楽園』はその名前を「ウラニア」と呼ぶ。その彼女は「全能の

父の御前で、その天上の歌で父を喜ばせながら、姉の知恵と遊び戯れていた」(79—12)。

この四行の出典は箴言八章30節で、欽定訳ではただ「Then I was by him, as one brought up with him: and I was daily his delight, rejoicing always before him」とあるだけであるが、ウルタカ訳では「rejoicing」のところが「Judeus」となっている。「Judo」は「遊ぶ、遊戯する」であり、「踊る、舞う、演ずる」の意味もある。関根正雄訳では「わたしは愛児として彼の傍かたわらにあり、日々わたしは彼の喜びとなり／いつも彼のみ前で遊んでいた」(教文館版『新訳旧約聖書Ⅳ諸書』1591ページ)とある。新共同訳では「御もとにあつて、わたしは巧みな者となり／日々、主を樂しませる者となつて／絶えず主の御前で樂を奏し」とある。しかし聖書ではいづれも「わたし」は「知恵」のことである。だが、ミルトンでは「知識」、というより「ウラニア」である。われわれ日本人の自然な連想としては、それが天よりの使者の天女であれば、羽衣伝説のように「舞をまう」印象が強い。「play」の原義に「to dance, leap for joy, rejoice, be glad」(OED)とあるのだから必ずしも無茶な連想ではない。『失樂園』前半の超越界を離れ、いよいよ後半の「より狭く限られた、眼に見え、日々、天体の運行する (narrower bound/Within the visible diurnal sphere, VII. 21—22)」「天地の記述に移るのであるから、「天圏の音楽」が聞こえ、「宇宙の舞踊」が見えるとも不自然ではない (cf. 'mystic dance, not without song,' V. 178)。

だが勢いにあまって不首尾に終る不安も隠せなかった。それが詩人に Bellerophon (VII. 18) を連想させた。天馬ペガサスに乗って天界に到り、神々の仲間入りをしようとするが、その不遜のゆえに神々の憎しみを買い、天馬から突き落されてアレイオンの野に墜落し、狂気に陥り、盲目となって、死に至るまで迷い歩いた、と伝えられる。これがミルトンに直ちに共通の悲劇を連想させる。「盲目 (darkness, VII. 27)」と「孤独 (solitude, VII. 28)」である。個人的にも社会的にも最悪の悲惨な状況にある。今やバックカスと狂宴にあけくれるその一味は宮廷にはびこり、それに

煽られてオルペウスを八つ裂きにしたトラキアの女たち、それにも似た罵詈雑言がミルトンをも飲みこみそうだ。ミルトンはオルペウスに自己を重ね合わせる。オルペウスの母は、九人の詩女神のひとりカリオペー(あるいはまたポリュムニア)とされる。彼女は息子の命を守ることができなかった(737-38)。しかしミルトンの頼むウラニアは、名こそ彼女たちの仲間、九人の詩女神のひとりであるが、「空しい夢想」(739)にすぎないオリンパスの女神とは違って天来のものだ、保護を切願する者をどうか裏切らないでください、と祈る。こうして詩神ウラニアへのインヴォケイションは第一行に帰って終る。この間に特長的なことは、知識、学への楽しみを全開していることである。匹夫もこれを奪うべからざるのみならず、必ずや少数の理解者、'fit audience, VII. 31.'は得られるであろう、という確信である。

なお、第一巻、第三巻、第七巻、第九巻、それぞれのインヴォケイションを並べて気付く点は、第一巻は霊(17)、第三巻は光(31)、がその祈願の対象であった。第七巻は第一巻の「天の詩神」(16)を受けて、ギリシア起源の具体名「ウラニア」(71)を出した。それが内実においてロゴスとしてキリストを指すならば、人、ともいえる。こうして霊から光、光から人へと次第に可視化、また具体化したともいうことができる。第九巻は不思議なことにインヴォケイションとは名ばかり詩人自身の覚悟を吐露しただけで、'thou'と呼びかける対象はない。'my celestial patroness, IX. 21.'と客観的な記述があるだけである。

こうして第七巻と第八巻、天使ラファエルを迎えて、あたかも友人同志のように親しく田舎風の食事をしながら天地創造の物語を聞く。しかし、この物語が終ってから振りかえり、第九巻の冒頭でそのときの会話を'venial discourse unblamed, IX. 5.'と評していることに私は興味を懐く。

*OED* の挙ぐる 'venial' の第一義は、'Worthy or admitting of pardon, forgiveness, remission; not grave or heinous; pardonable, light' で特に神学におつて 'sin' に用つて 'deadly' や 'mortal' の反意語とある。つまり重い七の「大罪」に対し、軽い「小罪」「微罪」に用いられる。'venial' と聞いて直ちに思いつくのは 'venial sin' である。そして第三義に 43. Allowable, permissible; blameless, rare. とつて『失樂園』のこの箇所を引用している。

これは主筋に無関係な長談義にふけた後ろめたさをいうのか、それとも墮落後の人間の知識が人間ばかりか森羅万象の存在をも脅かす危険性を孕んでいるのにくらべ、墮落以前はまだ「咎めだてることもない議論」(九五)であった、というのであろうか。全人類に死をもたらす、最大の「大罪 (Deadly Sin)」が迫った第九巻のインヴォケーションに 'venial' の語があることには注目せざるをえない。しかしこの二巻ほど読者の知識欲を刺戟する箇所はない。

ミルトン・カテキズム 天における出来事、「知らされなければ、とうてい人間の知識では及びえない事柄」(七五)を説き明かしてくれた「神聖なる解説者 (Divine interpreter, VII. 72)」天使ラファエル、片や超自然界の消息から、

もっと身近かな「この眼に見える天と地の世界が、初め、いかにして生じたか、いつ、何から造られたのか、またなんのために造られたのか」(七六—64)と、鹿の谷川の水をしたい喘ぐがごとく、尋ね求めるアダム、両者が交わす問答から、われわれはミルトン・カテキズムを編むことができる。

カルヴァン『ジュネーヴ教会信仰問答』には、「問一 人生の主な目的は何ですか。答 神を知ることです」<sup>なほ</sup>とある。これに倣えばミルトンの答は、アダムの口からは「神の意志に従うことでもあります」となる (cf. 'to observe/Immutably his sovran will, the end/Of what we are,' VII. 78-80)。

また『ウェストミンスター小教理問答』では、「答 人間の主な目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶこ

とである」となっている。天使ラファエルなら、「創造主つくりぬしに栄光を帰し、人生をさらに幸福にすることである」と答えたであろう(“To glorify the Maker, and infer/Thee also happier,” VII. 116-117.)。

ラファエルは、人間の幸福に資する知識を伝える「天からの使命 (commission from above, VII. 118)」を帯びて遣わされ、創世記「以前」の出来事はすでに第五・六巻で語った。それゆえアダムは、今や創世記「以後」、だが「彼の記憶以前 (Before his memory, VII. 66)」の出来事を尋ねる。けだし太陽も己が出生の由来を聞くために立ちどまり(ヨシユア記13に因む)、「眠り」も目を覚ます、いや徹夜になっても構わない、とアダムはいう(798-108)。これは詩人が寸暇を惜しみ孜孜として励んだ勉学の日々を連想させる。だが、ラファエルは知識も食物も同じく精神の容量をこえて過剰になると、飽食が滋養物を「放屁 (wind, VII. 130)」に変えるように、せっかく身につくはずの知恵をも愚かさに変えてしまう(7126-130)と、パッセージの最後に屁理屈への戒めを潜める。

かくして御子の創造が始まる。御子は「混沌」(7220)の只中へ乗り出す。御子に従う天使たちが見守るな両脚器コソクキか、御子は戦車を止め、手に黄金の「両脚器コソクキ」を取り、「この宇宙とすべての被造物の限界を定める (to circumscribe/This universe, and all created things, VII. 226-227)」。一方の脚を中心におき、他方の脚を広漠として暗澹たる深淵のなかぐるりと一回転させて、こう言った。「ここまで拡がるがよい。ここまですべてを汝の境界とせよ。これが汝の定められた正しい周辺である。おお、世界よ！」

Thus far extend, thus far thy bounds:

This be thy just circumference, O World!

VII. 230-231.

‘circumscribe’は、‘circum, around + scribere to make lines, write.’から‘to draw a line around, encompass, limit, confine.’の意となる。‘circumference’も同様で‘circum + fer-re to bear’からラテン語の原義は‘a bearing (of anything) about’である。コンパスの脚が御子の手に運ばれて、ピタリとマルがかかれたとき、‘O World’となる。御子（とらよりミルトンの）満面の笑みが見える。

コンパスは、インヴォケイションのウラニアと同じく、箴言第八章に由来する。その27節「主は深淵の面に輪を描いて境界とされた」（新共同訳）とある。そこが欽定訳では‘he set a compass upon the face of the depth’となっている。コンパスはイザヤ書四十四章13節にも、円を描くの用いる大工道具として登場する（ただしここでは偶像を造る場面、文語訳では「文回」）。古くから使われたものであるから、ダンテの『神曲』に登場するのも当然である（「天国篇」第一九歌40行）。ミルトンの影響をつけ無韻詩で翻訳したHenry Francis Cary, *The Divine Comedy* (1812) では‘He/Who turned his compass on the world’s extreme,’ (Paradise, Canto XIX. 37-38) となる。

次に興味ぶかいのは、ブレイクの「ヨーロッパ」の口絵をなす「日の老いたる者」である。「日の老いたる者」とはダニエル書（七・9、13、22）に登場する神であるが、ブレイクにあっては、不吉とされる左手にコンパスを持ち、左から吹きつける強い風に白髪白髯をなびかせながら、下の混沌に向かって、開いたコンパスを降ろしている。「彼は黄金のコンパスを造り、深淵を探り始めた」。

He formed golden compasses,

And began to explore the Abyss: . . .

I Urizen, VII. 39-40.

ミルトンにあっては、全能の力を帯び、威厳と知恵と愛とを冠とする栄光に輝く御子であるが、ブレイクにおいては白髪の老いたるユリゼンである。ユリゼンは時にセイタンに擬せられることがある。このように両者は対照的に異なる人物である。

二つともあれ、コンパスをまわして「神は天を造り、地を造った (Thus God the heaven created, thus the earth, VII. 232)」。この天と地はいまだ「<sup>かたち</sup>定形なく<sup>むなし</sup>虚空 (文語訳創世記 12) き物質 (Matter unformed and void, VII. 233)」の天であった。

この天は、先に門を開いて創造の業に御子を送りだした「天」(七20)、またやがてその業を終えて凱旋する御子を迎えた「天」(七553)ではない。こちらは、御子が父なる神とともに住まう「高き住<sup>すみか</sup>処なる天の天 (The heaven of heavens, his high abode, VII. 553) である。だが、「この新らしく造られた世界」(七617)の天は、「天の門から遠からずるところにある第二の天 (another heaven/From heaven gate not far, VII. 617-618) である。そしてこの第二の天が、人の住む地球の天である。いま御子が造った天と地 (七232) はこれであった。ウラニアの領分に属し、人間が科学的に知識をもって知りうる世界である。

それに引きかえ、「主の祈り」「天にましますわれらの父よ (Our Father which art in heaven)」の「天」は、『失楽

園』における第一の天である。『使徒信条』冒頭「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず (I believe in God the Father Almighty, Maker of heaven and earth.)」は創世記第一章第一節を踏まえたものに違いない。が、この「元始はじまりに神天地を創造つくたまへり」にしてからが、もっぱら神への賛美ということに意味はつき、第二節以下とは切離し、表題もしくは主題の提示と見るべきだ、という(関根正雄著作集13創世時代講解』10―13)。それゆえ、この「天」も『失樂園』第七巻の第二の天ではない。第一の天「the heaven of heavens (VII. 13 & 553)」は、神の絶対他者的主権性、超越性、聖性、遍在性、尊厳性を表わす象徴的表現で、実際にはこの天といえども神を容れることができないほど小さな存在でしかない(列王紀上八27、歴代志下二6、「神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができませぬ。'But will God indeed dwell on the earth? behold, the heaven and heaven of heavens cannot contain thee,' 1 Kings 8: 27)。

夏目漱石の『文学論』は、英訳聖書の「創世記第一章の冒頭」第五節まで、即ち創造第一日の記述を引用し、「此一節を読む者は信徒たると信徒たらざるとに論なく自ら壮大の感に打たれてひとり襟を正すを禁じ得ざるべし。……たゞ吾前にあるは神力の偉大なる叙述のみ。而して吾感ずるは偉大なる情緒のみ。

知を離れ識を絶して只此叙述を壮嚴とのみ思ふ」、そして後代の文学者で「此法を襲用したるもの」数多いなかで、「其最も成功したるものはMiltonなり」として『Paradise Lost, VII. 210-31を引用し、こう付加える、聖書の一節は「巨人の斧を用ゐて咄嗟に成るが如く自から雄渾にして毫も巧を求めたるの痕跡なし。『失樂園』に至っては瑰麗眼を喜ばしむるに足ると雖も多少の芝居気あり。叙述明快にして理路整然たると同時に崇高の感を弱むるが如し。従つて其価値(単に崇高的価値を云ふ)聖書に対して遜色なき能はず」と『漱石全集』十四101―202、204。『失樂園』から

の引用は、御子が怒濤逆まく混沌に乗り出し、コンパスをまわして宇宙とすべての被造物の境界を画した箇所である。漱石の引用はやゝ恣意的にすぎる。『失樂園』のこの箇所は、創世記以前の出来事、せいぜい第一章第一節に当るだけである。第二節はさらに10行(七<sup>233</sup>—<sup>242</sup>)、「光あれ」といわれた第一日(創世記一3—5)は18行(七<sup>243</sup>—<sup>260</sup>)に、それぞれ拡げられる。

聖書の記述の崇高性に異を挟むものではないが、仏の顔も三度まで、円空仏だけが仏像ではない。日曜日など聖書に飽いた読者がミルトンに向かったのも自然の理で、今日、アダムとイーヴの物語といえばミルトンが挙げられ、サタンといえはミルトンのセイタンが聖書の蛇にとって代った、といわれる(John Bailey, *Milton*, 143)。

サウサンプトン大学教授B・A・ライトは、漱石が挙げたのとほとんど同じ箇所(七<sup>205</sup>—<sup>223</sup>)を引用し、御子が「栄光の王」(七<sup>208</sup>)として創造の使命を帯び、大きく開いた天の門から出発し、混沌を分けゆく場面に響く「妙なる和音(harmonious sound, VII. 206)」と、第二巻でセイタンが破壊のために地獄の門を出発する場面の「軋きしむ…耳障りな、雷霆さながらの轟音(raring…/Harsh thunder, II. 880-882)」とを対比する。そして創造第五日の描写(七<sup>399</sup>—<sup>441</sup>)を掲げて、「ミルトンの最高の詩的偉業」と称える(B. A. Wright, *Milton's Paradise Lost*, 148)。創世記の数節をテキストとし、叙事詩々法を駆使して、このような創造物語を描ききるには膨大、かつ柔軟な博物の学識を必要とする、という。

光が造られた第一日、大空が造られた第二日は、まだ序盤で端々と事は運ぶが、第三日になると、にわか  
創世記 忙しくなる。一例をあげれば

第三日、(地質)私はヒマラヤ山脈を連想せざるをえない。海底から巨大な山々が隆起し、世界の最高峰と

なる。と同時に夥しい水量の長い瀑布が飛沫をあげて大洋になだれこむ。(植物) 一方、出来たばかりの大地に緑が芽生えたと思うと、たちまち葉が伸び、花が咲き、芳しい香りに包まれ、ついには亭々たる大樹が並び、山も谷も泉も川も緑に飾られて、さながら天国のように見え、大地は潤いをおびる。

第四日、(天文) 太陽は多孔質の球体で、第一日目に創造された光の大半はここに移されて、今見るような光の宮殿となる。他の多くの星々は泉に水を汲みに行くがごとく、この宮殿に来ては黄金の壺に光を汲んでゆく。明けの明星の角が輝くのはそのためである。月もまた満面に太陽からの光を受け、無数の星とともに夜の支配権を分かち合う。

第五日、(動物) 魚類と鳥類の誕生。「産めよ、増えよ」といわれると、海は豊饒の海にかわる。瀬戸、海、入江、湾、あらゆるところに稚魚はあふれ、鱗、鱗の輝く成魚が群れをなして泳ぎ、海の真ん中に山のように盛りあがる。「魚のなかには、ひとり」で、または伴侶と、海草を牧草のように食べ、珊瑚の林のなかを彷徨うもの、あるいは、戯れにチラとお日さまを見上げ、金色の斑点も鮮やかな波うつ上着を見せびらかすもの、真珠貝の殻のなかに身をひそめて餌を待つもの、かと思えば、岩陰に緘鎧おとしはろいをまとって餌食を狙うもの」

Part, single or with mate,

Graze the sea-weed, their pasture, and through groves

Of coral stray, or, sporting with quick glance,

Show to the sun their waved coats dropt with gold;

Or, in their pearly shells at ease, attend

Moist nutriment, or under rocks their food

In jointed armour watch: . . .

VII. 403-409.

最新設備の水族館か、あるいはゴーグルをかけて海に潜ったような楽しさ。さらには海豹あざむしや海豚イルカのショーもあり、ホエール・ウォッチングもある。

鳥類もまた鷺ついで、鶴つる、夜鳴鷺ナイテンジャー、鷄冠トシカの派手な雄鶏、孔雀、ときらびやかに並ぶが、私の一番印象をうけたのは白鳥の描写である。「誇らしげに真白な両翼をマントのように羽織った間から頸を弓形に高くもたげ、權のような脚で水を掻いていた。その堂々たる有様は御座船さながらであった、が、時に水面をけて、力強く翼をはばたき空へ高く舞い上がることもあった」(七<sup>438</sup>—440)。これは、ミルトンがかつてカム川で見た白鳥の姿ではないか。心なしか、「クライト学寮の淑女」と綽名された彼自身の姿と重なり合うところがあるように思われる。

第六日、(高等動物、人間) 創造の最後の日。地上の動物であって、「家畜、這うもの、地の獣 (Cattle, and creeping things, and beast of the Earth, VII. 452)」。‘Cattle’とつう言葉が元来 capital と同じく「財産」をあらわし、「頭」を意味することは多くの連想を呼びおこし興味ぶかい。

先ずは、のどかな牧場の風景であるが、最初に名前をあげられるのは獅子ライオンであった。草地在り上ったかと思うと、「黄褐色のライオンが半身を現わし、前脚でけて後半身を地から出し、束縛から解放されたかのように跳とび上がり、立ち上がって斑まだらなたてがみをうち振った」。

The grassy clods now calved; now half appeared

The tawny lion, pawing to get free  
His hinder parts, then springs, as broke from bonds,  
And rampant shakes his brinded mane; . . .

VII. 463-466.

最後には「地上で一番抜け目ない蛇 (The serpent, subtlest beast of all the field, VII. 495)」があげられる。だが、蛇もまだ害はなく、人間には素直に従った。

「天は栄光に輝き、偉大なる原動者の手 (the great First Mover's hand) が回す軌道に従って回転し、地は完璧な装いをまとって、にこやかに微笑んでいた」(七499—501)。

「こういう緊張した描写は、単に書物の知識だけで出来るものではない。これらのことは実際に生身をもって見た感じたりしたことに違いない。それぞれの種全体にわたる事柄が生々とした筆致とピッタリの言葉で描かれ、自然への驚嘆がある。ここには老齢になっても相変わらず、自然を鮮やかに己が心眼に見、かつ、そこに神の善と力の顕現あらわれを言祝ぐ、自然愛好家のミルトンがいる。ドライデンが「ミルトンは自然を書物の眼鏡を通して見た」と批判したのに対して、ランドーは「残念ながら：：ドライデンは、自然をフリート街の家並の合間から見た。もし自然をよく知り、自然の美しさを隈なく描いた詩人ありとすれば、それはミルトンであった」と応酬した」(B. A. Wright, *op. cit.* 150)。

しかしまだ、「既に造られた全てのものの目標である、最も重要なものが未だ造られてはいなかった」(七505—506)。

人間の創造である。次に展開される詩行は、けだし人間に対する定義の最も完璧なものであろう、「他の生きもののように常に下を見、道理を弁えないのと違い、聖なる理性を与えられ、背をのばして直立し、穏やかな顔を真っ直ぐに起こして他のものを支配し、自らを知り、そして自らを知るがゆえに神と交わるにふさわしい高邁な心もち、しかも同時に自分のもつ一切の善きものがどこから下賜されているかを知り、感謝し、虔んでその心と声と眼を天に向けてそそぎ、自分を万物の霊長として造り給うた、いと高き神を崇め拝むところの者」。

a creature who, not prone

And brute as other creatures, but endued

With sanctity of reason, might erect

His stature, and upright with front serene

Govern the rest, self-knowing; and from thence

Magnanimous to correspond with Heaven,

But grateful to acknowledge whence his good

Descends; thither with heart, and voice, and eyes,

Directed in devotion, to adore

And worship God supreme, who made him chief

Of all this works.

VII. 506-516.

ただ善悪を知るの木の実だけを禁じて第六日は終る（ただし聖書にこの木が登場するのは創世記第二章9節で、禁制は17節。創世記第一章は、第六日の記事で終る）。

六日間ですべての創造の仕事は終る。第七日は創世記では第二章に移され、神が仕事を離れ休息する日である。

『失樂園』の御子は天に戻り、父なる神とともに座につく。「第七日を祝福し聖別した」（759）のは父なる神である。

父なる神は、見えざる姿のまま御子とともに、ここより出かけ、しかもここに留まっておられた。偏在なる神はかかる特権をもっておられる、という（758—590）。それゆえ、「エホバよ、汝の御業は大いなるかな！ 汝の御力は無限なるかな！…かの巨人然たる悪天使たちを追放し給いし時よりも、さらに大いなる栄光のうちに今こそ汝凱旋し給う（Great are thy works, Jehovah! infinite/Thy power! . . . greater now in thy return/ Than from the Giant-angels: . . . VII. 802-806）」と天使たちの賛美をうけるときも、凱旋した「汝」も、偏在なる神、父エホバである。（現行版の解釈では、父が子の業績を独り占めしたような印象を与え、御子が可哀相に思われるが、三位一体なのだから、それでよいのか、とやや強引に納得させられていた。しかしファウラーは、初版のパンクチュエーションから御子に重点を移す解釈を提供している。後に触れる。）

第八巻には、イーヴの誕生について、神とアダムの交わす面白い問答がある。アダムは名前をつけてもらうため一番ずつ彼に近づく生きものを見て、伴侶のいない孤独を神に訴える——孤独にはなんの幸福も楽しみ

も満足もない、と。すると神は、「永遠の昔からわたしはただ独である。わたしに次ぐ者も、似ている者も、まして同等の者などいない。親しく交わるものとしては自分で造った生物や、低い地位の天使ばかりである。そこには何の楽しみもない、というのか」と問い返す（840—410）。それに対してアダムは応える。

「万物の主よ！ あなたはもともと御自分だけで完全な方であり、なんら欠けるところのない方です。あなたはすでに無限であり、また唯一者とはいえ、あらゆる数をみたしうる絶対者です、それゆえ子孫を殖やす必要はありません。

Supreme of things!

Thou in thyself art perfect, and in thee

Is no deficiency found; . . . No need that thou

Shouldst propagate, already infinite,

And through all numbers absolute, through One; . . .

VIII. 414-421.

あなたは他の者から離れて唯一人でおられても、いわば御自身と仲睦まじくしておられ、それ以上の親しい交わりを必要とされません。

Thou, in thy secrecy although alone,

Best with thyself accompanied, seek'st not

Social communication; . . .

VIII. 427-429

このアダムの科白は、諸家の指摘するとおり、アリストテレス『エウデモス倫理学』の次の一節とそっくりである、「自足せる人は有用な友だちを必要とすることもなく、また〔彼を〕喜ばず人たちも必要ではなく、他人と共に生活することも必要としない——彼は〔自分が〕自分自身と交わるだけで十分だからである。このことは神において最も明らかである。なぜというに、神は何ものをもさらに必要としないゆえに友をも必要としないであろうし、…友をもつこともないだろう」(124b、岩波版茂手木訳『アリストテレス全集』318頁)。

「しかしながら」とアリストテレスは続ける、「友は有用のためにも利益のためにもあるのではなく、徳ゆえの友のみが〔真の友〕である。われわれが何ものをも必要としない場合に、われわれはみな、われわれと楽しみを共にする人々を求める。…またわれわれに良くしてくれるだろう人々よりも、むしろわれわれに良くされるだろう人々を求める。そして、われわれが彼らをよりよく判別するのは、われわれが彼らが必要とするときよりも、われわれが自足しているときである。このときこそ、われわれは共に生活するに値する友を最も多く必要とするのである」。

前半の要点は、自足せる人は友を要しないことにあり、後半では自足せる人こそ友を必要とする、という正反対の結論になる。

ミルトンとアリストテレス、それぞれの言葉から私が先ず連想したのは、ダンテ『神曲』「天国篇」最後の「第十三歌」124—126行である。

おお、永遠の光よ、おのれの中のみましまし、

おのれのみおのれを知り、そしておのれに知られ

おのれを知りながら愛し、またほほえみ給う者よ。

(野上素一訳)

読者の心をうつのは、その自足、その唯一性、その静謐である。Robert Hollanderの注によると、この三行は、三位一体をうたったものだというのが、私には、むしろ神の唯一性を強調しているようにみえる。アリストテレスの引用の、むしろ前半にこそ、よりよく該当する。

一方、内村鑑三『基督教問答』の三位一体論のなかに興味ぶかい一節がある。内村はいう、神は完全であるから三位でなくてはならない、なぜなら、完全なる者は独り彼自身にて完全でなくてはならない、つまり宇宙万物がいまだ造られざる以前から完全でなければならぬ、神は永遠より愛であるというけれど、愛すべき受造物がなかったときに、単独の神は何を愛したか、「貴下は其時彼は彼自身を愛し給ふたと云はれませうが、然し自身を愛することは愛ではありません、少なくとも愛の最も劣等なる者であります、愛は言ふまでもなく交換的であります、愛する者があり、愛せられる者があつて始めて完全なる愛があるのであります」と。

では神は誰を友とし給うたかの問いに、「彼の中に三位があつて、彼は彼自身の中に聖なる社会を備え給ふたと云ふのであります、「三位の社会」 the Society of the Trinity とは米国第一の神学者ジョンナサン、エドワードの始めて用ひし熟語でありまして：其中に深い真理を含む辞句ことばであると思ひます」と答えている(『内村鑑三全集12』59—60頁)。完全なるがゆえに、愛する者を必要とする、ということになる。これは、先のアリストテレスの引用の後半部分と響き合うところがあるのではないか。

ともあれ、神はアダムのなかに神の似姿にふさわしい自由の霊の働きを認めて、アダムに「ふさわしい助け手」(help, VIII. 450)を連れてくる。あの問答は神がアダムの結婚資格を確認する口述試験であった。

第七・八巻の魅力は、そこがウラニアの領分、知識・科学の分野であったことである。天地の創造から人間の誕生に至るまでに要した時間が、いかに長いものであろうと、ミルトンは創世記の記事にしたがって七日間の出来事として描いた。読者にとっては、それはあたかもテレビの画面で、超長時間

の映像を早送りで見ているような感じだ。

こういう二巻があればこそ、『失樂園』がチャールズ・ダーウィンの愛読書となったのであろう。彼はビーグル号の航海に際し、『失樂園』を携えていった。自伝には、「一日中、科学に従事してはいられなかった……ミルトンの『失樂園』は私の大好きな本で、ビーグル号の航海中でのときどきの旅行で、小さな本を一冊しか持っていられないようなときには、私はいつもミルトンを選んだ」とある(八杉龍一・江上生子訳『ダーウィン自伝』筑摩叢書71頁)。ダーウィンは国内調査旅行のときにも、いつも『失樂園』は離さずに持ち歩いたものであった(今西錦司『世界の名著ダーウィン』解説11頁)。

ダーウィンが『失樂園』を愛読した理由の一つに、彼がケンブリッジ大学神学部の学生であり、ミルトンと同じくライト学寮に所属していたことが考えられる。イギリスの大学における学寮生活の親密さを考えると、ダーウィンがミルトンに特別な愛情を懐いたことは容易に理解できる。ましてダーウィンは神学部の学生であった。このことに今西錦司氏は注目している、「博物学者としてビーグル号に乗りこんではみたものの、大学で神学をやったダーウィンにとっては、博物学のどれが専門であるというほどの素養もなかった。それはかえってよかったかもしれない。だが

ら彼は、動植物から地質鉱物まで、万遍なく注意し、採集し、整理し、記録することができたのかもしれない」(『世界の名著ターウィーン』14頁)。

叙事詩『失樂園』の百科全集的性格が、いっそうターウィーンの感性を刺激した、と考えられる。浩瀚な『種の起源』の最終節は次のような文章で結ばれている。

いろいろな種類の多数の植物によっておおわれ、茂みに鳥は歌い、さまざまな昆虫がひらひら舞い、湿った土中を蠕虫はいまわる、そのような雑踏した堤を熟視し、相互にかくも異なり、相互にかくも複雑にもたれあった、これらの精妙につくられた生物たちが、すべて、われわれの周囲で作用しつつある法則によって生みだされたものであることを熟考するのは、興味ぶかい。

*It is interesting to contemplate an entangled bank, clothed with many plants of many kinds, with birds singing on the bushes, with various insects flitting about, and with worms crawling through the damp earth, and to reflect that these elaborately constructed forms, so different from each other, and dependent on each other in so complex a manner, have all been produced by laws acting around us.*

文末の「われわれの周囲で作用しつつある法則」とは、「自然選択」による進化の法則である。

このようにして、自然のたたかいかから、すなわち飢餓と死から、われわれの考えうる最高のことがら、つまり高

等動物の産出ということが、直接結果されるのである。生命はそのあまたの力とともに、最初わずかのものあるいはただ一個のものに、吹きこまれたとするこの見かた、そして、この惑星が確固たる重力法則に従って回転するあいだに、かくも単純な発端からきわめて美しくきわめて驚嘆すべき無限の形態が生じ、いまも生じつつあるというこの見かたのなかには、壮大なものがある。

(八木龍一訳『種の起原』(下)、岩波文庫、221—222頁)

Thus, from the war of nature, from famine and death, the most exalted object which we are capable of conceiving, namely, the production of the higher animals, directly follows. There is grandeur in this view of life, with its several powers, having been originally breathed by the Creator into a few forms or into one; and that, whilst this planet has gone cycling on according to the fixed law of gravity, from so simple a beginning endless forms most beautiful and most wonderful have been, and are being, evolved.

この息の長い文章は、十九世紀の特徴ではあるが、文壇に関わりのないダーウィンの場合には『失樂園』愛読の結果としか思われない。また自然の描写も『失樂園』第七卷、創造第三日目に展開される「自然」の反響を感じずにはいられない。特に最後の引用には明らかに第五卷470行以下のラファエルの言葉がある。「すべては一つの原質料から出来ており、様々な形相かたち、様々な段階の内質、そして生けるものの場合には様々な段階の生命、をそれぞれ与えられている。：樹木の場合には、根から軽やかに緑の茎が生じ、茎からはさらに軽快な葉が生じ、そして最後には完璧な花がその絢爛たる姿を現わし、馥郁たる香気を発するに至る」。

All things proceed, . . .

one first matter all,

Endued with various forms, various degrees

Of substance, and, in things that live, of life;

. . . . .  
So from the root

Springs lighter the green stalk, from thence the leaves

More aery, last the bright consummate flower

Spirits odorous breathes: . . . . . V. 470-482.

今、ダーウィンとミルトンは、二人が卒業したクライスト学寮の学生食堂ホステルにならべて肖像画がかかげられ、後輩たちの生活を見守っている(八木龍一『ダーウィンの生涯』48頁)。

ティヤール・ド・シャルダン  
だが十九世紀ダーウィンの進化論は、時の「初めから見ると進化論であった。種の起源から現在に至る発展を問うだけで、時の終りを見通したものではなかった。二十世紀になって、時の終りに収斂してゆく進化論、換言すれば「終りから見る」進化論が登場した。それがティヤール・

ド・シャルダンである。

わたしは、宇宙は進化するものであると信じる。  
 わたしは、進化は精神に向かってゆくと信じる。  
 わたしは、精神は、人間のなかで、人格的なものにおいて完成すると信じる。  
 わたしは、最高に人格的なものは普遍的キリストであると信じる。

『物質の核心』

山崎庸一郎『テイヤール・ド・シャルダン』119頁

彼の絶筆は、一九五五年四月七日の聖木曜日、つまり彼の死の三日前、日記の最終頁にしたためられた次のような断想であった。

聖木曜日、私の信じること。

(一) 聖パウロ 三つの節、すべてにおいてすべてである神。

(二) 宇宙⇕宇宙生成⇓生命生成⇓精神生成⇓キリスト生成

(三) 私のクレドの二項目

<p>キリストは宇宙の中心である</p>	<p>宇宙は中心をもつ、進化的に</p>
<p>キリスト教という現象</p>	<p>上方へ 前方へ</p>
<p>精神生成⇕キリスト生成(Ⅲパウロ)</p>	

テイヤール・ド・シャルダンの絶筆にある「三つの節」とは、コリント前書十五章二六、二七、二八節をさす。キリストは、「最後の敵」である死をもついに滅ぼし、万物をおのが足もとに従わせる。そしてそのとき、みずからも神に従う。こうして神は、すべてにおいてすべてとなる。これこそ「時の終り」の光景である。

アルファとオメガ

ミルトンは、この二つの進化論を踏まえている。

one Almighty is, from whom

All things proceed, and up to him return,

If not depraved from good, created all

Such to perfection, . . . V. 469-472.

(唯一の全能なる神が在いましたまひ)

すべてのものはその神から生じ、そして神に戻ってゆく、

善より逸脱しない限りは。すべてのものは、もともと

完全に善きものとして造られているからだ)

これが、ロマ書十一章36節「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっている。栄光永遠とこしえに神にあれ、アーメン」に拠ることは明らかである。

だが、ダーウィンの進化論は、すでに善より堕落して逸脱した状態から出発している。初め万物が神によって造られたとき、自然界には決して、飢餓も死も、なんの戦いも存在しなかったのである。堕落以前の自然を、『失樂園』はこのように語る。いまだ罪を知らぬ幸福なアダムとイーヴの周囲では、後に野生化し猛獣となる動物たちが飛んだり、跳ねたり、嬉々として戯れていた。「獅子は楽しげに立ちあがり、その前足で仔山羊をあやしていた。熊、虎、山猫、豹の群れも、二人の前でふざけながら跳ねており、大きな図体をもてあました象も、必死に彼らのご機嫌を伺おうとして、しなやかで長い鼻を輪に巻いていた」(四<sup>343</sup>—<sup>347</sup>)。

これが、人間が原罪を犯したあとでは一変し、「獣は獣と、鳥は鳥と、魚は魚と、凄惨な争いを始めるにいった。すべてのものが、草木を食べるのをやめて、互に相食あいはむにいった。人間を今までのように畏れ敬うことはなくなり、すぐに逃げ出すか、すれ違うときは物凄い形相ぎょうそうで睨みつけるようになった」(二〇710—714)。これが、テレビの「ダーウィンが来た」で見る自然界の実情である。だが、このような「その牙と爪を赤く血に染めた自然」(In Memoriam, LVI, 115)が、神の造った自然であるはずがない。

「地を従わせ、海の魚と空の鳥と地に動くすべての生き物とを隈なく治めよ (Subdue it [i. e. the earth], and throughout dominion hold/ Over fish of the sea, and fowl of the air/ And every living thing that moves on the earth. VII. 532-534)」と命じられた人間が堕落したとき、その支配 (dominion) 下にある一切の被造物もまた「滅びのなわめ」に縛られ、「今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続け」「切なる思いで神の子たちの出現を待ち望んでいる」(ロマ八19—22)のである。

だが、やがて時満ちて待望の実現されたとき、再び「おおかみは子羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏し、  
 ；乳のみ子は毒蛇のほらに戯れ、乳離れの子は手をまむしの穴に入れる」(イザヤ十一6—8)。自然においてのみならず、人間もまた「剣を打ちかえて鋤とし、その槍を打ちかえて鎌とし、国は国にむかって剣をあげず、もはや戦いのことは学ばない」(イザヤ二4)であろう。

『失樂園』第三巻もまた、そのような終りの時、勝利の時を、次のように明確に預言する。永遠の命をもつ宇宙の完成 キリストが、たとえ一旦は暫らく「死」に屈し、人となったキリスト(人性)は死の所有となるも、罪の負

債を払った暁には、死の餌食として忌まわしい墓場に放置することも、穢れを知らぬキリストの魂をそこで永久に腐敗に委ねることも、父の御心ではないはずである。必ずやキリストは勝利者として復活し、彼を征服した者を征服し、その戦利品を奪いかえず。そのとき「死」は死に至る重傷ふかをうけ、死の刺は挽ひぎとられ、無残な姿をさらして屈服するであろう。復活したキリストは意気高らかに天に凱旋し、地獄を虜とりことして率い、縛りあげた暗黒の天使たちを父なる神に見せる。：神の力によって死から蘇ったキリストは、すべての敵を滅ぼし、最後には「死」をも滅ぼし、死の亡骸なきがらで墓場の飢えをみたす。こうしてキリストが贖った多くの者とともに再び天に入り、父にまみえるとき、父の御顔に怒りの黒雲はもはやなく、平和と和解の表情だけを見るであろう。今より後、怒りはもはやなく、御前には全き喜びだけがあるであろう、という。

Though now to Death I yield, and am his due,  
 All that of me can die, yet, that debt paid,

Thou [i. e. Father] wilt not leave me in the loathsome grave,  
 His prey, nor suffer my unspotted soul  
 For ever with corruption there to dwell;  
 But I shall rise victorious, and subdue  
 My vanquisher, spoiled of his vaunted spoil.  
 Death his death's wound shall then receive, and stoop  
 Inglorious, of his mortal sting disarmed;  
 I through the ample air in triumph high  
 Shall lead Hell captive maugre Hell, and show  
 The powers of Darkness bound. . . . .  
 While, by thee raised, I ruin all my foes,  
 Death last, and with his carcase glut the grave;  
 Then, with the multitude of my redeemed,  
 Shall enter Heaven, long absent, and return,  
 Father, to see thy face, wherein no cloud  
 Of anger shall remain, but peace assured  
 And reconciliation: wrath shall be no more  
 Thenceforth, but in thy presence joy entire.

III. 245-265.

このように御子キリストが使命を終え、罪とその結果である死も滅ぼされると、古い「世界は燃え、その灰燼のなから新しい天と新しい地が生まれ出るであろう」、そこには義しき者が住み、長い患難を経たのち、喜びと愛と美しき真理とに心躍らせながら黄金の行為の溢れ出る黄金の日々を迎えるにいたる。その暁には汝（キリスト）は王者の笏を傍らに置く。もはや王者の笏の必要はないからだ。かくして神はすべてにおいてすべてとなるであろう」。

The World shall burn, and from her ashes spring  
New Heaven and Earth, wherein the just shall dwell,  
And after all their tribulations long  
See golden days, fruitful of golden deeds,  
With Joy and Love triumphing; and fair Truth.  
Then thou thy regal sceptre shalt lay by,  
For regal sceptre then no more shall need;  
God shall be all in all.                    III. 334-341.

テイヤール・ド・シャルダンの絶筆において印象的な「最後の敵」の死という言葉も、「すべてにおいてすべてとなる」神という言葉も、聖書の記述を豊かに肉づけした形で、『失樂園』第三巻に見ることができる。

「神がすべてにおいてすべてとなる」という表現が、もう一箇所、こちらは『失樂園』全体の構造に関わりをもつと思わせるところが、エペソ書第一章にある。

そこには、こうある。神は人間を愛し、天地創造以前から、イエス・キリストによって神の子にしようと選び、人間の犯した罪はキリストの血をもて贖い、赦す。一方、神はキリストを死者のなかから復活させ、天において神の右の座に着かせ、現世ばかりか来世の、あらゆるものの上に置く。やがて時満ちて、神の計画が完成されるときには、天にあるものも地にあるものも、頭であるキリストのもとに一つにまとめられ、その足もとに従う。かかるキリストが教会に与えられ、教会こそキリストの体である。そこに満ち溢れるものは、「すべてにおいてすべてとなる」神である（エペソ一3—23）。これこそ『失樂園』全十二巻の梗概（argument）といえるのではないか。

時の終りの光景は、第十二巻に厳かに語られている。「この世は自らの重荷に呻きつつ時を経てゆく」（十二 537—539）にせよ、やがて義人には救いの時、悪人には復讐の時が訪れる。かつて「女の末裔」と預言されていた人物が、ここぞ「汝の救い主、汝の主」として普く知られ、最後には、雲に乗って父なる神の栄光のうちに天より現われ、セイタシとその邪悪な世界を滅ぼし、その燃えさかる焔のなかから、浄められ精煉された新しい天と新しい地をおこし、正義と平和と愛にもとづく永遠無窮の時代が来て、歓喜と永遠の祝福という実りをもたらす。

The Woman's Seed—obscurely then foretold,

Now amplier known thy Saviour and thy Lord:

Last in the clouds from Heaven to be revealed  
In glory of the Father, to dissolve  
Satan with his perverted world; then raise  
From the conflagrant mass, purged and refined,  
New Heavens, new Earth, ages of endless date,  
Founded in righteousness and peace and love,  
To bring forth fruits, joy and eternal bliss.

XII. 543-551.

初め「死」と「苦惱」をもたらす果実への言及で始まった『失樂園』の物語は長い道程を経て、ここで「歓喜」と「永遠の祝福」の果実をもたらすキリストへの賛美で終ろうとしている。

悪の  
解 体  
だが、この世界を焼きつくし燃えさかる焰も、なに一つ消滅させることはないのである。『失樂園』全巻のなかで「消滅させる (annihilate)」という言葉が使われるのは唯一回、第六卷<sup>347</sup>行、天上の戦いにおいて反逆天使たちがどんな深傷<sup>ふか</sup>を負っても直ぐに癒えることを語る箇所だ、天使というものは「全面的な滅亡によるので

なければ死ぬという<sup>ふか</sup>ことはありえない (Spirits . . . Cannot by annihilating die.) という。その他の場合、'dissolve' とか 'dissolution' という語が用いられている。『キリスト教教義論』第一卷第七章「創造論」のなかでは、被造物が「消滅」することはありえないこと、すなわち、聖書のなかに 'annihilatio' なる語がないと同時に、論理的に不可能

であることを論証している（コロンビア版 XV 26—29、エール版 VI 310—311、拙著『ミルトンと近代』421）。

one Almighty is, from whom

All things proceed, and up to him return. V. 469–470.

「唯一の神、父である神がおられ、万物はこの神から出、…この神へ帰って行く」（1コリント八6）。

「神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである」（ヨハネ黙示録一8と二13）。

「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっている」（ロマ十一36）。

『失樂園』の二行が、これらの聖書の言葉に由来することは、『教義論』のなかの言及からも分かる（エール版 VI 307）。

『教義論』は続けてこう説く、「神が万物の、最初の、唯一・絶対の原因であるからには、神は、周知の四種の原因（動力因、質料因、形相因、目的因）をも神自身のなかに包含し、掌握していなければならない。それゆえ、質料因は神か無か、どちらかでなければならない。しかし「無」はなんの原因にもなりえない」（エール版 VI 307—308）。

『失樂園』の先の二行に続く「一つの原因（one first matter, V. 472）」なるものは、「時間のなかの或る時点で、神から生じたものでなければならない」（エール版 VI 307）。こうして「質料は決して巧ちるこのない状態で神から生じ

た。したがって、墮落の後でさえ、その本質に関するかぎり、今も、決して巧くないものである」(エール版VI 30)。  
 それゆえ、セイタンと彼に惑わされた邪悪な世界も決して消滅することはなく、最後の審判の炎々と燃えさかる焔によって、ただ解体され、悪は浄化され、精煉され(十二<sup>546</sup>—<sup>548</sup>)、なんと、最後には、赦されて、元の姿に戻るることができるのである(Till their lost shape, permitted, they resumed, X. 574)。

**死者の復活**  
 ギリシアの靈魂不滅論とは異なり、肉体の死と同時に靈魂も死ぬというミルトンの靈魂死滅論(mortalism)も、この論理の延長上にある。これは靈魂の価値を下げるものではなく、肉体の価値を高めるものである。

ヘブル語には、ギリシア語のように靈魂(フシケー)と肉体(ソーマ)を分かち言葉がなく、「ネヘーシュ」の一語で、両者を一つのものとして表わした。したがって、肉体の死が歴然たる事実である以上、そのとき靈魂も死ぬと考えられた。死を肉体の牢獄から靈魂が解放されることと考えたソクラテスの堂々たる死と、血のように汗を滴らせながら、この死の杯をわたしから取りのけてください、ただし御心のままに、と祈ったイエスを比べれば、その違いは明らかである。死は「恐怖の王」であり、「最後の敵」であった。望みはひたすら「死者の復活」にかかると、神の造りたまえるもの一つとして消滅することはありえないのである。

**Leine考**  
 父なる神は天地の創造を御子に命じて言った、「直ちに戦車を乗り入れ、混沌に命じて、定められた境界内に天と地とをあらしめよ、混沌は測りしれぬが、無限を充たすわたしが存在する。それゆえ、その空間

は空虚ではない。わたしは何ものにも限定されないものながら、自らそこから退き、為すも為さぬも自由なわが善をそこに現わさないが、必然も偶然もわたしには近づけず、わが意志として示すものが運命となる」と。

ride forth, and bid the Deep

Within appointed bounds be Heav'n and Earth,

Boundless the Deep, because I am who fill

Infinitude, nor vacuous the space.

Though I uncircumscrib'd my self retire,

And put not forth my goodness, which is free

To act or not, Necessitie and Chance

Approach not mee, and what I will is Fate.

VII. 166-173. (Columbia Ed.)

神は「無から」ではなく「神から」創造するのであるから、神ならぬ物を存在せしめるためには、その場所を空けなければならない。そのため神は自ら退き、その効力を留保する (I. . . my self retire, / And put not forth my goodness) とするのが従来の解釈である。

しかし、翻って、いま御子を遠征に送り出す緊張したこの時点、しかもきわめて限られた行数で、神が己のそもそもの「本質」を論じていると考えることは、いかに神とはいえ不適切である。むしろ、子に送る餞はなむけ、ないし勵ましの言葉として「実存」的に解釈すべきではないだろうか。Boundless the Deep は分詞構文の挿入句で、御子が戦車を乗り入れ活躍する混沌は、深く暗く茫漠と広がっているが、按ずるには及ばない、父は偏在の神であるからだ。

創造に先だち、「全能にして永遠の父なる神」(七136—137)は「御子」(七138)に向かって、その玉座から、「すべてを覆う聖霊と能力とをわたしは汝につけて送る(My overshadowing Spirit and might with thee/ I send along. VII. 165-166)」といい、やがて六日間にわたる創造の仕事を終え、天に凱旋した第七日目、御子は天上の玉座に父なる神とともに座った。ここでは「玉座(th Imperial Throne/ Of Godhead. VII. 585-586)」が単数である。その不思議さを解きあかすように、父なる神もまた見えざる姿のまま御子とともに、こっより出かけ、しかもここに留まっておられた、「偏在なる神はかかる特権をもつておられる(such privilege/ Hath Omnipresence, VII. 589-590)」という。そして天使たちは天地創造と六日にわたる御業を称えて歌った、「エホバよ、汝の御業は大いなるかな！ 汝の御力は無限なるかなー(Great are thy works, Jehovah, infinite/ Thy power, VII. 602-603)」と。

‘Omnipresence’ と ‘Jehovah’ の絶妙な用語の使用にはただ感嘆の舌を巻くばかり。‘Jehovah’ は欽定訳出エジプト記第六章3節にあらわれ、神はこれが「わたしの名」であるという。同じく第三章14—15節によって、それは「わたしはある」という意味であることが分かる。つまり、あらゆるところに「わたしはある」のである。今、創造の第一日、御業は御子に託された。‘I . . . my self retire./ And put not forth my goodness’ というのである。今こそ御子の出番である。‘Put forth thy goodness.’ と言いたかったのである。前途は冥暗漠々たれど、神の善を縛るもの(Necessity)‘防げるもの(Chance)は、なにひとつ起こらない。神意は御言のままに必ず実現する(fate ∨ I. fate, that which has been spoken.)’。やがて、心安んじて行け、さっへ行っても「わたしはある(I am who fill/ Infinitude)」と語ったのである。

キリス  
ト賛歌

ところで、神の遍在が語られる箇所、ファウラーは、初版を始め初期の版と現代の版との間にパンクチュエーションの違いがあることに注目し、自らの版を次のように決定した。

The filial power arrived, and sat him down

With his great Father (for he also went

Invisible, yet stayed: such privilege

Hath omnipresence) and the work ordained,

Author and end of all things, and from work

Now resting, blessed and hallowed the seventh day, . . .

VII. 587-592.

初期の版は、'such (VII. 589)'の前のロロンのごとくに、もう一つ開きの括弧を置いていた。その不自然さを避けるため現行版はすべて'for (VII. 588)'の前の括弧を消した。そうすると主語が御子から父に移り、意味が変わってくる。そこで、ファウラーは上記のように訂正した。ただし賢明な訂正であったと思う。七日目に休むのは、御子にふさわしいし、またヘブル書第十二章2節には、「創始者または完成者であるイエス」(欽定訳では'Jesus the author and finisher')のごとく言葉がある。

唯一の主、イエス・キリストがおられ、万物はこの主によって存在し、わたしたちもこの主によって存在してい

る（1コリント八6）。

天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、万物は御子において造られた。つまり、万物は御子によって、御子のために造られた。御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられている（コロサイ一16—17）。

神は、この御子を万物の相続者と定め、また御子によって世界を創造された（ヘブル一2）。

これらの聖句を総合すれば、パンクチュエーションは初版どおり、「The filial power」（力の御子）を主語とし、「Author and end of all things」（すべてのものの創始者であり、かつ同時にその終極の目標）はその同格と取るのが、原意に近いと思われる。「創始者にして完成者なるイエス」への賛美は言葉によるだけでなく、堅琴、風笛、管、弦のあらゆる楽器が奏でられ、黄金の香炉から立ちのぼる薫煙が聖なる山にたちこめ、その姿を隠した（759—600）。

ここに引用した聖句はすべて、ティヤール・ド・シャルダンの絶筆に見られる信仰と同じ方向を指し、終末の光景を連想させる。だが、『失樂園』でこの箇所は、まだセイトンたちを一掃し、それを補うために天地万物と人間が創造されたばかり、人間もいまだ罪を犯す前の場面である。創造された天地、とくに楽園のアダムとイーヴは、それを垣間見たセイトンの心に、嫉妬・羨望・後悔と、痛切な苦悩を感じさせるものであった。が、第七巻の描写には夏目漱石も認める高揚感があった。地獄に墜ちたセイトンにとって、この新しきものの創造は審判の一つのかたちであった。最後の審判の「予型」と見なすことができる。（未完）